

知って
おきたい

Fantastic!
ファンタスティック!
漢詩ワールド

日本の 漢詩

宇野直人

第五回

儒教再審

荻生徂徠



東都四時樂 其一

東叡山頭花似氛
東叡山下雪紛紛
笙歌千隊齊聲唱
那得暫時停白雲

東都四時の樂 其の一

東叡山頭 花氛に似たり
東叡山下 雪紛紛
笙歌 千隊 声を齊しうして唱ふ
那ぞ 暫時 白雲を停むるを得んや

荻生徂徠

七言絶句（上平・十二文）

其二

両国橋辺動權歌
江風涼月水微波
怪来岸上人声寂
恰是扁舟仙女過

其二

両国 橋辺 權歌動む
江風 涼月 水 微しく波だつ
怪み来る 岸上 人声の寂たるを
恰も是れ 扁舟 仙女過ぐ

荻生徂徠

其三

秋満品川十二欄
東方千騎簇銀鞍
清歌一闋人如月
笑指滄波洗玉盤

其三

秋は満つ 品川の十二欄
東方 千騎 銀鞍簇まる
清歌 一闋 人月の如く
笑つて指す 滄波の 玉盤を洗ふを

荻生徂徠

七言絶句（上平・十四寒）

其四

澄江風雪夜霏霏
一葉双槳舟似飛
自是仙家酒偏醉
無人能道剡溪歸

其の四

澄江 風雪 夜 霏霏たり
一葉 双槳 舟 飛ぶに似たり
是れ自り 仙家 酒 偏に酔ふ
人の 能く 剡溪より 歸るを 道ふこと無し

荻生徂徠

七言絶句（上平・五微）

護州新歳

買屋養痾護葉州・
優游卒歳欲忘憂・
忽聞鐘鼓城樓動・
便見雲霞滄海流・
高枕西山來雪色・
脚盃短髮照春愁・
千秋知是干誰事・
肯教東風催不休・

護州の新歳

荻生徂徠

屋を買ひ痾を養ふ護葉の州・
優游 歳を卒へて憂ひを忘れんと欲す
忽ち聞く鐘鼓の城樓に動むを
便ち見る雲霞の滄海に流るるを
枕を高うすれば西山雪色來り
盃を啣めば短髮 春愁を照す
千秋 知んぬ是れ誰が事にか干する
肯て東風をして催して休まざら教めん

七言律詩（下平・十一尤）

春江花月夜

人道春江好
春江況月明
林花岸上發
仙桂波中生
搖動花兼月
影香清且輕
初疑美人面
照見髻花橫
又訝嫦娥鏡
冶容誰為情
笑靨脣微啓
百媚灑盈盈
昔聞月中桂
託根白玉京
縹渺飛仙藥
落水寂無聲
依稀漢浦女
羅襪波上行
解佩珠徑寸
光彩令人驚

春江花月の夜

荻生徂徠

五言古詩

人は道ふ春江好しと
春江 況んや月明なるをや
林花 岸上に發き
仙桂 波中に生ず
揺動す 花と月と
影香 清らかにして且つ輕やかなり
初め疑ふ 美人の面の
髻花の横たはるを照見するかと
又訝る 嫦娥の鏡の
冶容 誰が為にか情あると
笑靨 脣 微しく啓き
百媚 灑にして盈盈
昔聞く 月中の桂
根を白玉の京に託すと
縹渺として仙藥飛び
水に落ちて 寂として声無し
依稀たり 漢浦の女
羅襪 波上に行く
佩を解く 珠 徑寸
光彩 人をして驚か令む

今我非交甫

惆悵岸鷄鳴
江月忽不見
江月無常榮
唯有江潮水
依旧繞江城

今我 交甫に非ず

惆悵すれば岸鷄鳴く
江月 忽ち見えぬ
江月 常には榮ゆること無し
唯だ 江潮の水の
旧に依つて 江城を繞る有るのみ